当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同研究課題「日琉語族内的声調類型論の再構築」 2022 年度第 2 回研究会(通算第 6 回目)報告書

日時: 2022年9月8日(日) 10:30~16:30

場所:Zoom によるオンライン開催

使用言語:日本語

共催:基幹研究「アジア・アフリカの言語動態の記述と記録:アジア・アフリカに生きる人々

の言語・文化への深い理解を目指して(DDDLing)」

プログラム:

10:30-12:00 平田秀(AA 研共同研究員, 武蔵野大学)

三重県尾鷲方言のアクセント体系のユニバーサルな再解釈

13:30-15:00 白田理人(AA 研共同研究員,広島大学)

北琉球奄美喜界島小野津方言における韻律的単位一複合動詞を中心に一

15:30-16:30 全員

全体討議

報告者:青井隼人(AA研共同研究員)

2022 年度第 2 回研究会では 2 件の研究発表があった。平田氏の発表は、三重県尾鷲方言のアクセントについて報告したものであり、従来「式と核の多型体系」として解釈されてきた当該方言のアクセント(声調)体系について、特に Haraguchi (1977)を援用しながら、新しい解釈の可能性を提案した。一方、白田氏の発表は、北琉球奄美喜界島小野津方言の複合動詞のアクセントについて報告したものであり、名詞アクセントと比較しながら、両者を統一的に説明できる解釈の提案を試みた。全体討議では、2 件の発表を踏まえて、積極的な意見交換がおこなわれた。

三重県尾鷲方言のアクセント体系の ユニバーサルな再解釈

平田 秀 (武蔵野大学)

共同利用・共同研究課題 「日琉語族内的声調類型論の再構築」 2022年度第2回研究会



この発表の構成

- 前半:尾鷲方言のアクセント体系の事実をお話しする
- 後半:尾鷲方言のアクセント体系をユニバーサルな 観点でとらえ直すことに向け、前提条件を整えることを試みる

MU

1

2

三重県尾鷲(おわせ)市

- ・ 三重県南部に位置する人口1.6万の市
- 本発表で扱う尾鷲方言とは、1954年の尾鷲市成立 前の旧尾鷲町にあたる地区で話されている方言を指





三重県下諸方言のアクセントの系統

- ・ 三重県北中部:上野(1987)における中央式京都 型の諸方言が話されている
 - 要は京都方言・大阪方言などとアクセント上の性質がまったく同じ方言
 - 2拍名詞の類の統合のしかたは、1/2・3/4/5
 - 京都方言・大阪方言と共時的に同一の、高起平進式・低起 上昇式+下げ核による体系
- 三重県南部(おおむね大台ヶ原以南):中央式では ない諸方言が話されている
 - 尾鷲方言の2拍名詞の類の統合のしかたは、1/2・3/4・5

MU

3

4

尾鷲方言のアクセント体系

- ・ 尾鷲方言のアクセント体系:3種の式+下げ核(平田2020)
- ・式:文節が担い手となる、文節の音調の方向を規定 する要素
 - ・ 尾鷲方言の3式:1拍卓立式、2拍卓立式、平進式(後述)
- 下げ核:拍が担い手となる、音調の下がり目を規定 する要素
 - ・ 尾鷲方言において、拍はモーラに一致
 - ・ 下げ核: 下げ核を担う拍の次の拍を下げる
 - 日本語諸方言では、下げ核、昇り核(担う拍から上がる)、 上げ核(次の拍を上げる)の3種の核が確認されている (Uwano 2012)

MVU

式と核の日本語アクセント論の 枠組みの中での私見

- ・ 式:複数種のうちの種別が問題になる→声調 (tone)に類似の要素
- ・ 核: 単語の中の位置が問題になる→強勢 (stress) に類似の要素
- ・早田(1999: 35)では、日本語諸方言の式(とN型アクセント)を「声調」と表記
- 早田(1999)は式を「声調そのもの」ととらえていると発表者は解釈しているが、発表者自身は、式は自立しないため、声調に類似してはいるものの、声調そのものではないと考えている

MVU

5

尾鷲方言の語例(4拍語)

・ 3種の式(文節の音調の方向が対立)+下げ核(下 がり目の位置が対立)による体系

2拍卓立式 a. トモダチ[ワ。 b. [<mark>カ</mark>]プセルワ。e. [<mark>メジ</mark>]ルシワ。g. [××]××ワ。 c. エ[<mark>ハ</mark>]ガキワ。f. イ[<mark>チジ</mark>]クワ。 h. [<mark>ムラサ</mark>]キワ。 d. カミ[ソ]リワ。

「bやeがなぜ平進式ではないのか?」

7

9

MU

8

平進式の特殊なふるまい ・ 平進式は、1拍卓立式と2拍卓立式の2式とは別のふ るまいを見せる 1拍卓立式 a'. コノトモダチ[ワ。 1拍卓立式 b'. コノ[<mark>カ</mark>]プセルワ。 c'. コノエ[ハ]ガキワ。 1拍卓立式 1拍卓立式 d'. コノカミ[ソ]リワ。 2拍卓立式 e'. コノ[メジ]ルシワ。 2拍卓立式 f'. コノイ[チジ]クワ。 g'.コ[ノ××]××ワ。 ~コ[ノ]××]××ワ。 平進式 h'. コ[<mark>ノムラサ</mark>]キワ。 ~コ[<mark>ノ</mark>]ムラサ]キワ。 平進式 MU

• 「平進式の下がらない文節」は、「下がらない文 節」に続く場合、低く進む

平進式の特殊なふるまい

- コ[ノ+[クジラ→コ[ノ]クジラ
 - ・cf. コ[ノ+[クジラ]ワ→コ[ノクジラ]ワ~ コ[ノ]クジラ]ワ
- アソ[コ+[クル→アソ[コ]クル
 - cf. アソ[コ]ニ+[クル→アソ[コ]ニ[クル
- 「フル+「アメ→「フル]アメ
- 「ダンゴ+「クウ→「ダンゴ]クウ
 - ・ cf. [ダンゴ]オ+[クウ→[ダンゴ]オ[クウ

MU

尾鷲方言の式の非典型性

- ・ 京都方言の高起平進式と異なり、尾鷲方言の平進式 は一貫した始まりの高低の特徴をもたず、たいらに 進むことしか保証しない
- ・ また、尾鷲方言の1拍卓立式、2拍卓立式も、やは り一貫した始まりの高低の特徴をもたない

平進式の本質とは?

- また、1拍卓立式かつ無核の文節(コ[ワタシ[ワ、コレ[ワ、コレ[オ、サカナ[オ、 ニワ[ニ・・・・など、生産的に作成可能)に平進式の 文節が続く場合、先行する文節の最終拍を上げる働 きをもつ
- [ダンゴ:コ[ノ]ダンゴ、コ[ノダンゴ]ワ~ `コ[**ノ**]ダンゴ゚]ヷ
- [モメ]ン:コ[ノモメ]ン~コ[ノ]モメ]ン、 コ[ノモメ]ンワ~コ[ノ]モメ]ンワ
- cf. オ[ト]コ:コノオ[ト]コ、コノオ[ト]コワ
- pre-accentingが平進式の本質という可能性(後半で考察)

MU

尾鷲方言の1拍語・2拍語 蚊[- 蚊ー[ワ コノ蚊[- コノ蚊ー[ワ 1拍卓立式 [葉]ー [葉]ーワ コノ[葉]ー コノ[葉]ーワ [手一ワ 平進式 コ[ノ] 手一 コ[ノ] 手一ワ ウ[シ ウシ[ワ コノウ[シ コノウシ[ワ 1拍卓立式
 [1]
 [1]
 [1]
 [1]
 [1]
 [1]
 [1]
 [2]
 [2]
 [2]
 [2]
 [3]
 [4]
 [3]
 [4]
 [3]
 [4]
 [3]
 [4]
 [3]
 [4]
 [3]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]
 [4]</t 平進式

11 12

2

MU

MU



日本語諸方言をどう位置づけるか

- Hyman (2018): A language with tone is one in which pitch is a contrastive feature of at least some morphemes.
- Hymanの前提にたつと、日本語諸方言の分析を 「外にもっていく」際には、「どうにかして」位置 の問題を解決させる方向でtoneのふるまいに落と し込むのが建設的と考えられる

MU

13

14

日本語諸方言をどう位置づけるか

- 日本語諸方言のアクセントは、以下の1~4に大別 される(cf. 上野 1989)
- 1. 式の対立をもつ多型アクセント(式の種別の対立と核の位置の対立が併存)
- 2. 式の対立をもたない多型アクセント(核の位置の対立のみ)
- 3. N型アクセント
- 4. アクセントの対立をもたない方言

MU

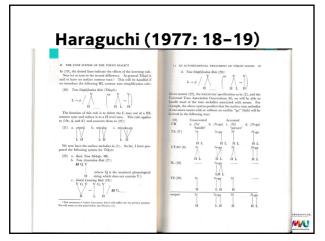
日本語諸方言をどう位置づけるか

- 詰めるべき点はあるが、Haraguchi (2002)の Melodyという概念は、前述の1~4を同じ枠組み で解釈すること試みている点で有用
- 2の東京方言: HL Melody+Hを連結させる場所を 調整
- 1の大阪方言: HL Melody (高起平進式に相当) とLHL Melody (低起上昇式に相当) +Hを連結させる場所を調整
- 3の鹿児島方言: LHL Melody (A型に相当) とLH Melody (B型に相当)
- ・ 4の方言:何かしら1つのMelodyを設定すればよ

MU

15

16



Harry STOR STYRING OF THE GOAL SEALEST

b. [Sureige] State [Sureige] State
c. onlike(sign) Inflighting State
d. State [Sureige] State
l. If [H. core though the rare more premound difference in the problem of air of e.g., while state [Sureige] State
l. If [H. core though the rare more premound difference in the problem of air of e.g., while state [Sureige] State or nor. Then the H. core the state of the st

17 18

日本語諸方言をどう位置づけるか

- (純粋な疑問) たとえば複雑な3型アクセント体系を、3つのMelodyに落とし込むことはできるのでしょうか
- 2型アクセントは、(雑な言い方で申し訳ありませんが) おそらく [Defaultともう1つ] で解決できる
- 新たなデータの取得が難しい間に、極めて多様な日本語諸方言のtoneをすべて説明できるモデルを組み立てることをめざす

MU

尾鷲方言をどう位置づけるか

- ・尾鷲方言の3つの式+下げ核の体系をどうMelody の体系に落とし込むか?
- 東京方言、大阪方言のようにHを連結させる場所で 位置の対立を解決するのであれば、3つMelodyが 必要
- ・ カミ[ソ]リ、イ[チジ]ク、[ムラサ]キ
- エ[ハ]ガキ、[メジ]ルシ、[××]××
- LHL、LHHL、HLのような3つのMelodyを設定するのは、LHHLがOCP違反で問題になりそう

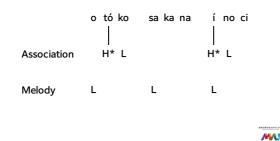
MU

19

20

尾鷲方言をどう位置づけるか

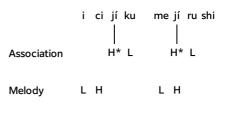
 L、LH、Hの3つのMelodyを設定しておいて、 H*Lを連結した上で、H*Lより左にMelodyを振る



__

尾鷲方言をどう位置づけるか

 L、LH、Hの3つのMelodyを設定しておいて、 H*Lを連結した上で、H*Lより左にMelodyを振る

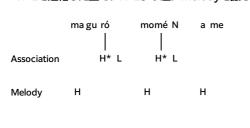


21

22

尾鷲方言をどう位置づけるか

 L、LH、Hの3つのMelodyを設定しておいて、 H*Lを連結した上で、H*Lより左にMelodyを振る



MVU

尾鷲方言をどう位置づけるか

[<mark>アメ</mark>〜コ[<mark>ノ</mark>]アメ:H Melodyはboundaryに付 与されると解釈

ko no · a me

Association

Melody L H

MVU

MU

23

MU

その他の方言 み」「Melody+H*I

「H*L連結のみ」「Melody+H*L連結」 「Melodyのみ」で、日本語アクセント論における 類型が反映できる?



上野善道 (1987) 「日本本土結方言アクセントの系譜と分布 (2) 」「日本学士院记要」42-1: 15-70.
 上野善道 (1989) 「日本語のアクセント)杉藤美代子編 [講像日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻 (上) ! 明治書院: 178-205.
 尾馬市文連縣學報範令員会員 (1969) 「尾脇市史 下巻!
 早田際洋 (1999) 「音韻のタイポロジー」 大修範囲店.
 平田秀 (2020) 「三重県尾筋方色のアクセント研究」ひつじ書房.
 Haraguchi, Shosuke. 1977. The Tone Pattern of Japanese: An Autosegmental Theory of Tonology. Katakusha.
 Haraguchi, Shosuke. 2002. "Accent", In Natsuko Tsujimura (ed.) The Handbook of Japanese Linguistics. Blackwell. 1-30.
 Hyman, Larry M. 2018. "What tone teaches us about language", Language 94-3, 698-709
 Uwano, Zendo. 2012. "Three types of accent kernels in Japanese", Lingua 122: 1415-1440.

25 26

謝辞

 本発表は、日本学術振興会特別研究員奨励費「三重 県尾鷲市方言のアクセント研究」(課題番号: 14J09547)および日本学術振興会科学研究費補 助金「紀伊半島熊野灘沿岸地域諸方言のアクセント研究」(研究活動スタート支援・課題番号: 16H06784)の助成をうけたものです。

MU

白田理人「北琉球奄美喜界島小野津方言における韻律的単位一複合動詞を中心に一」

発表要旨

喜界島小野津方言のアクセントについて、名詞は比較的詳細な調査研究が行われてきた一方で、動詞を対象とした調査研究は限られており、名詞の体系と動詞の体系の統一的な解釈が課題となっていた。そのような背景を踏まえ、発表者は、4拍の語幹と2拍の接辞からなる6拍動詞のアクセントを調査し、語幹が名詞に、接辞が1拍助詞の連続に準じた振る舞いを示すことをすでに報告した。しかしながら、複合動詞について詳細に見ると、語幹の前部要素に指定されたアクセント型が動詞の音調型を決定する条件の一つとなるにも関わらず、語幹前部要素のアクセント型と動詞の音調型の対応関係が合理的に説明できないという問題が明らかとなった。このため、本発表では、語幹前部要素2拍・語幹後部要素2拍・接辞2拍からなる6拍複合動詞を対象に、語幹前部要素のアクセント型と、複合動詞の音調型の関係について、韻律的単位の拡張という観点から検討し、①韻律的単位の拡張の点で、複合動詞語幹前部要素が名詞に、複合動詞語幹後部要素が助詞に準じた振る舞いを示すこと、②末尾核型の韻律的単位の拡張において、長音は韻律的単位に含まれないことを論じた。